



図版1. 《ASK, SEEK, KNOCK, - Door》2017年 199.1×487.9cm

岩絵具、墨、箔、アートグルー／和紙

撮影：末正真礼生 写真提供：コバヤシ画廊

会期：  
2020年11月16日(月)  
— 12月19日(土)

会場：  
武蔵野美術大学美術館  
展示室3、4

武蔵野美術大学 美術館・図書館では「Door is Ajar ドアは開いているか 山本直彰展」を開催します。現代日本画を牽引する作家のひとりである山本直彰(本学造形学部日本画学科教授)は、従来の日本画の枠に収まらない内面性の強い抽象的な心象世界を描き続けてきました。とりわけ、実物のドアを支持体として用いた「DOOR」シリーズは、新たな日本画の絵画表現として注目を集めました。

本展タイトルにある「Ajar」とは、ドアなどが半ば開かれた状態を指します。内と外、自己と他者、生と死といった、相反する様々なものを分かちつつ結ぶ存在であるドアを基点に、聖書あるいは神話、小説といった物語を発想源とする近年の代表作約20点と、過去、現在、未来を彷徨する「時間」を主題とした大型の新作によって、山本の作品世界をご覧ください。

休館日：日曜日

開館時間：10:00-18:00(土曜祝日は17:00閉館)

入場料：無料

主催：武蔵野美術大学 美術館・図書館

協力：武蔵野美術大学 日本画学科研究室

※会期などは変更になる場合があります。

## 本展の趣旨



図版 2. 《帰還 XXII》2014年 276.0×227.3cm  
岩絵具、箔、アートグルー／合成紙  
撮影：末正真礼生 提供：コバヤシ画廊

現代日本画を牽引する作家のひとりである山本直彰(1950年-)は、伝統的な技法に根ざしながらも、これまでの日本画とは一線を画する、荒い筆致や緊張感のある構図等によって、内面性の強い抽象的な心象世界を描いてきました。とりわけ、実物のドアを支持体として用いた「DOOR」シリーズは、新たな日本画の絵画表現として広く注目を集めました。

近年の作品の多くは、聖書あるいは神話、小説といった物語を発想の源としています。そこには、かつての歴史画や物語画のように具体的な人物や出来事は描かれず、象徴的に用いた矩形の形象や、放射状に広がる描写によって表された寂寥とした風景が現れます。

本展にあわせて構想された新作では、過去、現在、未来といった「時間」を主題に、これまで描いてきたドローイングをコラージュのひとつの素材として使い、展示室の壁一面に広がる大画面を構成します。記憶の断片ともいえるドローイングの数々は画面の中で結びつき、山本の自叙的な作品へと再生されます。

内と外、自己と他者、生と死といった、相反する様々なものを分かちつつ結ぶ存在であるドアを基点に、多様な主題によって展開した近年の代表作と、本展にあわせて制作する新作によって山本の作品世界をご覧ください。

※本展は山本直彰教授の退任記念展として開催します。

## 作家紹介



図版 3. 《M氏夫妻の肖像》1981年 227.0×182.0cm  
岩絵具、箔、膠／麻紙  
撮影：稲口俊太

山本直彰(やまもと・なおあき)：

1950年生まれ。1969年愛知県立芸術大学日本画科に入学し、片岡球子に師事。4年次からは大森運夫に学ぶ。大学在学時から新制作協会展、創画展に出品。1975年愛知県立芸術大学大学院修了。1987年創画会賞初受賞。日本近代美術研究会「読画会」に参加。1992年から1年間、文化庁芸術家在外派遣研究員としてプラハに滞在。1996年神奈川県民ホールギャラリーにて「現代作家シリーズ'96 山本直彰展」開催。2009年平塚市美術館にて個展「日本画の今 山本直彰展 帰還する風景。」開催。翌2010年芸術選奨文部科学大臣賞、神奈川県文化賞受賞。

2009年武蔵野美術大学造形学部日本画学科客員教授に着任、2011年より同学科特任教授を務める。

## 展示構成



図版4. 《IKAROS 2012》2012年 277.0×233.3cm  
岩絵具、墨、箔、アートグルー／薄美濃紙  
撮影：末正真礼生 提供：コバヤシ画廊

## 第1章 物語の向こう

第1章では、2000年代以降に制作された「DOOR」「IKAROS」「PIETA」「帰還」といった代表的なシリーズを中心に、聖書あるいは神話、小説を発想の源とした作品群を展示します。中学高校とミッションスクールに通い、青年期より宗教絵画に親しんだ山本にとって、聖書における物語世界は一つの原風景といえます。

90年代から取り組み続けている「DOOR」は、近年「ASK, SEEK, KNOCK」という聖句と組み合わせたり、赤茶や漆黒の色面や豪壮な筆致による重々しい印象から、豊かな白色と均整のとれた構図による澄み渡った精神性をそなえた作品へと変化しました。

「IKAROS」は、現実社会の不安に対峙し描き出そうという、絵画に向かう山本の真摯な姿勢があらわれています。本章では、アメリカ同時多発テロ事件のあった2001年、そして東日本大震災の翌年に描かれた2012年の作品を展示します。山本が主題として選んだ物語は、常に人間の在り方に対する問いを孕んでいます。山本は、それらを直接的に描き出すのではなく、物語に内包する精神性を咀嚼し自己の内面に取り込むことで、その向こうに見える独自の抽象世界を描き出します。



図版5. 《M氏の肖像》1987年 181.8×227.3cm  
岩絵具、箔、膠／麻紙  
撮影：稲口俊太

## 第2章 去来する時間

第2章では、70年代から90年代までの各時代に描かれた人物像と、本展にあわせて制作する新作を展示します。

山本は、片岡球子から薫陶を受けた学生時代からプラハに滞在する90年代前半まで、具象的な人物像に取り組み続けました。山本にとってこの期間は「人間」を問うこと、さらには絵画表現そのものへの模索と格闘の時期だったといえます。とりわけ、特定のモデルを繰り返し描いた「M氏」シリーズでは、眼前にある身体を描き出そうという試みから、人物の輪郭線や背景描写を重層化させることによって、作家とモデル、絵画をとりまく時間の厚みを生起させた作品へとその表現は変容します。新作では、これまで描いてきたドローイングをコラージュの素材として貼り合わせ、幅16メートルの大画面に再構成することで、過去、現在、未来といった山本の彷徨する「時間」を描き出します。アトリエに積み重なる膨大な数のドローイングは、モデルや事物、風景と向き合った絵画における記憶といえます。山本の内に渦巻いていた小さな物語として、ドローイングが絵画空間の中に降り重なることで、ひとつの自叙伝のような新たな作品世界を生成します。



参考図版 | 新作 (部分)  
撮影：倉橋史記

図版 6. 《IKAROS 20015》2001年 130.3×388.0cm  
岩絵具、箔、アートグルー／麻紙  
撮影：山本紉



#### 関連イベント

作家による作品解説や座談会の映像を Web にて公開予定。  
詳細が決まり次第、当館 Web サイトにてお知らせいたします。

#### [同時期開催展覧会]

美術館

「十時啓悦——樹木と漆と暮らし」

2020年11月16日(月)–12月19日(土)

「所蔵品展——ふたしかなデザイン(仮)」

2020年11月16日(月)–12月19日(土)

「ムサビのファカルティ展(仮)」

2020年11月30日(月)–12月19日(土)

民俗資料室

「紙・木・藁に見る祈りの造形」

2020年10月26日–12月19日(土)

#### お問い合わせ先：

武蔵野美術大学 美術館・図書館  
東京都小平市小川町 1-736  
tel: 042-342-6003 fax: 042-342-6451  
<https://mauml.musabi.ac.jp>

美術館広報担当  
mail: [prmsm@musabi.ac.jp](mailto:prmsm@musabi.ac.jp)

#### プレス用図版をご希望の方へ：

- ・下記の注意点を参照の上、ご希望の図版と必要事項を、Eメールまでお知らせください。  
(お名前、ご所属、電話番号、Eメール、媒体名、掲載号、発行予定日、コーナータイトル)
- ・指定のクレジットを必ず明記してください。
- ・原則的には図版のトリミング、部分使用、文字載せはご遠慮ください。
- ・掲載内容確認のため、発行前にPDF等でレイアウトをお送りください。
- ・紙媒体は掲載見本のご寄贈(掲載ページのPDF可)、ウェブ媒体は掲載ページのURL お知らせをお願いします。